

BBLセミナー コメント資料

2025年1月30日

「社会的インパクト評価から見たEBPM
～WHYとWHATの重視～」へのコメント

神戸学院大学法学部
准教授 橋本 圭多

ご報告へのコメント

橋本圭多（神戸学院大学法学部）

全体へのコメント

- なぜ評価や測定自体が目的化してしまうのか
 - 「WHY・WHAT→HOW」の主客転倒（スライド7,9）
 - 評価の前提となる「意図」がなおざりにされ、評価をするしない以前に評価が所与の活動に
 - 評価の当事者であることが重要（スライド25「エビデンスfor what? for whom?」）
- アウトカム指標データベース
 - ロジックモデルの作成や業績測定におけるベストプラクティスの提供
 - 業績やインパクトは何かを念入りに検討する（「とりあえず評価」ではなく）
 - 最終アウトカムに近づくほど抽象的に。測定可能な形への操作化が課題
 - Ex. 「交通安全を推進するまちづくり」
→ 「域内の交通事故発生率を全国平均で〇〇%削減するまちづくり」

全体へのコメント

- エビデンスの「網羅性」
 - スライド22「四つの側面の観点から、エビデンスの質が担保されている必要がある」
 - 他方で、日本の行政実務では「網羅性」に過度なエフォートを投じることでエビデンスを「量」的に担保しようとしているのではないか
 - 評価する行為自体が（アリバイ作りとしての）「エビデンス」残しに

補足的コメント

- **WHO** – 評価の実施主体をめぐる問題
 - 自己評価か第三者評価か
 - 自律的な評価か他律的な評価か
 - 制度化された評価かアドホックな評価か
- **WHEN** – 評価の実施と結果公表のタイミング
 - 実務上妥当と認められるエビデンスの水準をどこに設定するのか
- **WHERE** – エビデンスの所在を特定する
 - 一次資料・データの作成には時間や人的・金銭的成本がかかる
 - 既存の資料やデータを利用し、効率的にエビデンスの精度を高める

WHEN – 評価の実施と結果公表のタイミング

- 評価の妥当性に対する見解の対立
 - キャンベル
 - 実験的アプローチに基づいてプログラムの効果を検証することを提案
 - クロンバック
 - 評価はアートであり科学的調査とは異なることを指摘
- 「科学的評価」と「実用的評価」の姿勢として対比的に整理
 - 「この両方の意見に賛成したいと思う人は多いだろう。すなわち、**評価は科学的研究の高い水準を満たすべき**であり、同時に**プログラムの意思決定者の情報ニーズに仕えるべき**であるところ、現実には、この2つの目標はしばしば両立させにくいという点が問題なのである。（中略）評価者は、**知見の妥当性を確保するための手続き**と、その**知見を消費者にとってタイムリーで、意味があり、有用なものとするための手続き**との間に、到達可能な均衡点を見つけだしていかなければならなくなる」（Rossi, Lipsey, and Freeman 2004: 23-5=2005: 23-5）

WHEN – 評価の実施と結果公表のタイミング

- 「評価においてもっとも重要な目的は、真実であることを示すことではなく、改善することである」 (Stufflebeam 2005: 62)
 - 学術研究：科学的探求や検証を通じて命題の正しさを明らかにすることに關心
 - 評価研究：調査対象となるプログラムの改善に寄与するような評価結果を産出することに關心
- 学術研究上の方法論争に比べると、評価研究ではよりプラグマティックな対応をとることで実務に寄与する傾向

WHERE – エビデンスの所在を特定する

- アメリカの国際開発局「インドネシアにおける乳幼児生存活動プログラムの評価」 (Datta 1997: 36-7)
 - 5年のプロジェクトとして行われ、3年経った時点で取り組みの達成状況やインパクトについて中間的な評価を実施
- 評価において課せられた環境的制約
 - 3週間という限られた期間
 - 評価にあてられる人員は4人と小規模のチーム
 - インドネシアの人口は1億7500万人 (当時)
 - 人々は約6000の島に広範にわたって分布

WHERE – エビデンスの所在を特定する

評価の設問	手法
AID の取り組みの文脈はどのようなものか AID 独自の貢献はどのようなものか	文書、インタビュー、以前の報告書を通じた歴史分析 米の自給自足、貧困の減少、教育の拡大といった変化の見込みのある貢献に関する質的事例研究による記述
全体的に、インドネシアは他のアジア諸国とどのように比較されるのか	世界銀行データの二次分析
活動はどのように実施されるのか	質的文書分析とインタビュー
母子サービスに対するプログラムのインパクトとは何か	家族計画や子どもの栄養状況に関する全国データを用いた時系列比較 終了した特定プロジェクトの報告書に関する質的分析
予防接種に対するプログラムのインパクトとは何か	DTP1 (ジフテリア・破傷風・百日咳三種混合ワクチンの第1回接種)、ポリオ1 (ポリオ予防ワクチン第1回接種)、BCG (結核予防ワクチン)、はしか予防、ワクチン新生児破傷風ワクチンの適用範囲に関する保健省のデータや AID プロジェクトからのデータを用いた時系列比較 インフラの変化 (たとえばワクチンの効能を維持するために中央から周辺部への低温流通システムを確立すること) に関する保健省のデータの質的分析 成功したワクチン輸送と地域診療所 (インドネシア語で posyandu) の設立とを結びつける質的事例研究と一連の出来事分析
医療サービスの効率性に対するインパクトとは何か	時系列のワクチン生産に関する非公開データ (都市部と農村部において 1985 年から 1986 年までと 1988 年から 1989 年までのあいだの適用範囲の公平さの改善を示す) の比較分析
乳幼児の死亡率に対するインパクトとは何か	病院記録からの地域データを用いた、プログラムを実施する地域とそうでない地域、あるいは介入の対象となる病気とならない病気による準実験的な比較による事前事後分析 (プログラムを実施する地域と実施しない地域のいずれにおいても、介入の対象とならない病気に変化が見られない場合、推論が著しく強化される)

地理・人・金銭・時間的制約がかえって評価デザインのトレードオフを最適化